

最近、読んで勇気・元気をもらった本「白秋期」

26期生・岡田美乃利

最近、読んだ本のなかで 五木寛之著の「白秋期」が私の考えに大きな影響を与えた。

この「白秋期」、かなり多くの方々が既に読まれた方が、おいでかと思えます。それらの方は時間のかなりの浪費かと思えますが、私の蛇足の文に付き合ってください。

親鸞聖人は1173年4月産れ、没は、1263年1月で89歳迄の人生でした。親鸞は自伝的な記述をした著書が少なく、もしくは現存しないため、その生涯については不明確な事柄が多い。

私のような人物が人の人生、しかも親鸞聖人を語ろうなんて、笑止千万、超生意気なことをいうつもりは、サラサラないことは当然です。

五木さんは『白秋期』のなかで、冒頭次のように述べられています。

「『**黄金期**』は人生の後半に訪れる」アクメという言葉があります。生物の進化の頂点をしめす言葉らしい。昔、私は、恥ずかしながら官能小説の用語かと思っていました。最近になって知ったのですが、このアクメは『全盛』とか『最良の時期』とか『花の盛りのころ』とか、そんなギリシアのことばを語源とするそうです。要するに、クライマックスとか『黄金期』ということらしい。黄金期を自然の営みに転ずれば、実りと収穫の季節の秋、すなわち『白秋期』と考えてもいいでしょう。人間の年にすれば、だいたい50歳前後だろうと、これまで思っていました。「人生五十年」というのが、常識の時代だったのです。しかし、最新の生命科学の研究によれば、人間の自然寿命はどうやら百年ぐらいあって、しかも医学や医療の進歩で、多くの人々が、その自然寿命を全うする時代になるというのです。

百歳といえ、私（五木さん）の子供の頃は仙人のような存在で、治外法権の世界と考えてきました。それが百歳人生が常識となる日が、目前に迫っているという。こうなると当然、人生の黄金期の考え方にも、変更を求められることになります。

私はこれからの人生の黄金期、すなわち『白秋期』は急激に引き上げられて六十代、七十代になっていくと考えるようになりました。六十、七十といえ、老人というのがこれまでの常識です。それが、昨今のこの年代の人々の行動様式を観察していると、この年代こそが、アクメと化しているとさえ思うようになりました。

たとえば親鸞は八十歳を超えてから、数多の著作や、和讃を残しました。この活動期は、親鸞にとってのアクメ、黄金期であったと私は考えます。



(中 略)

年齢でなく『季節』を生きる人生観

中国には古来より

青春

朱夏

白秋

玄冬

と、人間の一生を自然の移りかわりになぞらえ、人生を四つに区分する考え方があります。

「青春」というのは、言うまでもなく若々しい成長期。恋愛憧憬期

「朱夏」は真っ赤な夏。社会に出て、働き、結婚して家庭を築く。子供を教育し、そして社会的貢献を果たす。人間の活動期、フル回転の季節です。人生五十年時代は、この季節が黄金期と考えられていました。

その次の季節が白秋です。「白秋」はフル回転からシフト・ダウンし人生のひととおりの役割を果たしたあと、生々しい生存競争の世界から離れ、自由の身となり、秋空のようにシーンと澄み切った静かな境地に暮らす時期。同時にこれまでの生き方をリセットし、新境地で活動する時期と考えられます。

以上が、五木寛之氏の「白秋期」の冒頭部分です。

私が感動したのは、親鸞が誕生し物心付いたころは、世は乱世（治承の乱、寿永の乱）や数万人が餓死した養和の飢饉、平家全盛の時期で、源氏の血を引く親鸞は暗殺の危機に遭遇するなど、正に乱世の真ただ中の時代でした。親鸞 32 歳のとき、専修念仏の停止（ちょうじ）が後鳥羽上皇の怒りに触れ、親鸞以外 4 名の死罪、法然ならびに親鸞を含む・7 名の弟子が流罪に処せられる。この時、法然・親鸞らは僧籍を剥奪される。親鸞は越後国国府（現・新潟県上越市）に配流へ。1211 年親鸞、赦免。1236 年、親鸞 62～63 歳ごろに帰京。

1247 年 75 歳頃、補足・改定を続けてきた「教行信証」完成。

1248 年、「浄土和讃」と「高僧和讃」を撰述

1258 年（親鸞 85 歳）まで多数の本の撰述。

1262 年（89 歳）入滅

親鸞を主人公とした歴史小説は、みなさん良くご存知のように多く出されている。但し、親鸞自身は生涯にわたり自伝的な記述をした著書が少なく不明確な事柄が多い。その限られた行実に沿って作られているため、内容の大部分がフィクションであるといわれている。

私はそうであったとしても親鸞の「最盛期」は 75 歳～85 歳頃までではと考える。そうであるなら、「私はもう年齢が…」という言葉は禁句ではなかろうか。

そう思い込むことによって自分を許す、ということにならないだろうか、と最近考える。気が付くのは遅かったのかも。しかしまだ89歳まで私は10年以上あるのでは、と。

歴史上の偉大な親鸞と凡才な私を比較しよう等と毛頭思わないが、気概だけは、その足元に数ミリでも数センチでも近づきたいと考える昨今です。

資料

五木寛之・著「白秋期」：日本経済新聞出版社 2019年1月（780円）

